

早稲田大学審査学位論文  
博士（人間科学）  
概要書

がんに罹患した母親が病気について  
子どもに伝える際の促進・阻害要因と  
母親の心理的適応

Psychological Adjustment of Mothers with  
Cancer and Promoting / Obstructing Factors  
When Telling Their Medical Condition to Their  
Children

2019年7月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

小川 祐子

OGAWA, Yuko

研究指導担当教員： 鈴木 伸一 教授

子育て中の親ががんに罹患した場合、自身の病気を子どもに伝えることは困難であり、家族内での情報共有が不十分のままに治療が進むことが少なくない。家族内での開かれたコミュニケーションは、がん患者を親に持つ子どもが望んでいることであるとともに、がん患者が自身の病気について家族と話すことができないことは、患者の抑うつや不安と関連することが指摘されている。本論文は、母親がん患者に焦点をあて、子育て中の母親がん患者が自身のがんについて子どもに伝える際の促進・阻害要因とその後の母親の心理的適応について検討を行った。さらに、自身のがんについて子どもに伝えようとしている母親がん患者へのサポートプログラムについて、その効果を検討した。

これまで、この領域の研究は記述的・質的研究が多かったが、本論文は、子育て中のがん患者が自身のがんについて子どもに伝えることとがん患者の心理的適応との関連を定量的に検討するとともに、自身のがんについて子どもに伝える際の促進・阻害要因について明らかにすることで、本邦における子育て中のがん患者への支援を充実させていくための基礎的な資料となるものである。さらに、子どもに話すべきか否か、あるいは、どのようにして話すべきかといった患者の意思決定支援にもつながる研究である。

第1章では、子育て中のがん患者やその家族において親の病気や病状がどのように伝えられているのか、またその促進・阻害要因としては、どのような要因があるのかなどに関する研究や、子育て中のがん患者に対する既存のサポートの構成要素に関する研究が展望され、以下の問題点が整理された。(1) 親が自身のがんについて子どもに伝えている程度やその伝え方と、患者の心理的適応との関連について定量的に検討されていない。(2) 親が自身のがんについて子どもに伝える際の促進・阻害要因について、定量的な検討が不十分である。(3) 子どもに自身のがんについて伝えようとする親への支援をねらいとした既存のサポートがどのように役立っているのかは明らかでない。そこで、本研究では、これらの3点を明らかにすることを目的として、以下の研究が行われた。

第2章においては、問題点(1)を解決するために、母親が自身のがんについて子どもに伝えることと母親の心理的適応との関連について検討を行った。子育て中の母親がん患者31名を対象に、質問紙調査を行った。母親のがんについて子どもに伝えた程度と母親の心理的適応との関連を検討した結果、伝えた程度と母親の不安、抑うつ、**Post-traumatic Stress Symptoms (PTSS)** との有意な関連はみられなかった。一方で、**Posttraumatic Growth (PTG)** に有意な中程度の正の相関関係が認められた。以上の結果から、がんに罹患した母親が自身のがんについて子どもに伝えることは、その後の母親の不安や抑うつとはあまり関連がなく、PTGの高さとの関連がみられた。これは、日本の母親では一般的に、自身の病気について子どもに伝えることを躊躇する傾向にあるが、がんについて伝えることが必ずしも母親の心理的混乱を深める訳ではない可能性を示唆しているといえる。つまり、がんについて子どもに伝えるまでは、母親は自身の病気に向き合うことの恐怖を予感し、伝えることを躊躇する気持ちや戸惑いを経験するが、伝えたからといって必ずしも母親の不安や落ち込みが深まる訳ではなく、周囲からのサポートや闘病に対する前向きな視点を獲得できるといった、適応的な体験を得ている可能性が考えられた。

第3章においては、問題点(2)を解決するために、母親が自身のがんについて子どもに伝える際の促進・阻害要因の特徴について検討を行った。研究2-1では、子育て中の母親がん患者29名を対象に質問紙調査を実施し、母親のがんについて子どもに伝えるきっかけ

や理由、および、伝えなかった理由について、自由記述による回答を得た。自由記述から抽出された 109 個の記述について質的内容分析を行った結果、24 の下位項目と 9 つのカテゴリに分類された。研究 2-2 では、研究 2-1 で得られた下位項目および先行研究から、母親のがんについて子どもに伝える際の促進要因 19 項目、阻害要因 17 項目を抽出し、尺度作成を行った。母親がん患者 86 名を対象に調査を実施し、主成分分析を行った結果、最終的に促進要因として 1 因子 5 項目、阻害要因として 1 因子 4 項目が抽出された。これらの項目から、促進要因には、子どもとの関係性を重要視する内容が中核となっていること、阻害要因には、自身の病気のせいで子どもに負担をかけたくないという母親の気持ちとともに、伝えた後の子どもの反応に対する不安や心配が示された。

第 4 章においては、問題点 (3) を解決するために、子どもに自身のがんについて伝えようとする母親への支援をねらいとした既存のサポートが、母親のがんについて子どもに伝える際の促進・阻害要因や母親の心理的適応にどのような影響を与えるかを検討することを目的とした。子育て中の母親がん患者を対象として、東京都内のがん診療連携拠点病院に入院・通院中のがん患者、および、患者会に所属しているがん患者のうち、本研究における 2 回の調査に同意した患者 10 名を対象に質問紙調査を実施した。

サポートの有無による促進・阻害要因、伝えた段階、母親の心理的適応の変化を検討するため、サポート有群 (6 名) とサポート無群 (4 名) について、以下の検討を行った。まず、各変数の変化量について、促進要因、伝えた段階、PTG においては増加群と不変/減少群の 2 群、阻害要因、抑うつ、不安、PTSS においては増加/不変群と減少群の 2 群に分けて、サポート有群とサポート無群とのクロス表を作成し、Fisher の正確確率検定を行った。その結果、有意な結果は得られなかったが、サポート有群はサポート無群に比べて阻害要因や PTSS が減少傾向であることが示された。本研究の対象者は各群 6 名以下であり、少ないサンプル数であることから、統計的に有意な結果は見出すことができなかったが、上記の得点傾向から、既存のサポートは、母親がん患者が自身のがんについて子どもに話す際の阻害要因や、母親の不安、PTSS といったネガティブな心理変数に対する支援に寄与する可能性が考えられた。

第 5 章においては、本研究から得られた知見に基づき、総括的な考察が行われた。第 1 節では、まず本研究の結果および得られた知見が整理され、(1) 母親が自身のがんについて子どもに伝えることと母親の心理的適応との関連、(2) 母親が自身のがんについて子どもに伝える際の促進・阻害要因、(3) 既存のサポートが促進・阻害要因、伝えた段階、および、母親の心理的適応に与える影響について考察した。第 2 節では本研究の臨床的意義や臨床応用可能性が議論され、第 3 節では限界点を踏まえた今後の課題が述べられた。

本論文では、子育て中の母親がん患者の心理適応と親子コミュニケーションの問題について、対象者の病状、治療歴、年齢、家族構成、心理状態などの生物・心理・社会的側面から検討を行い、学際的人間科学の視点から考察し、がん患者への統合的支援の具体策について提言を行った。今後、本論文の知見が、がん患者への統合的支援に貢献するとともに、人間科学的研究の発展に寄与することを期待したい。